
バカとテストと疫病神

ラーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと疫病神

【Nコード】

N1263Y

【作者名】

ラーカー

【あらすじ】

疫病神と呼ばれ、敵にまわしたら、さまざま手段を使い災厄を撒き散らすとされ、なかなか人と仲良くなることの少ない山本総司は、振り分け試験を受けらなかつたがゆえに、Fクラスに入る事に。そこでの个性的なクラスメイトとどう過ごすのか？

バカテスの二次です。作者は文才がなく行き当たりばつたりなので批評やアドバイスなどをお待ちしています。因みに更新は不定期です。

始まる前（前書き）

それじゃ、始まり始まりってか？

始まる前

うざいくらいに澄み渡った空を眺めながら、僕こと山本やまもと総司そうじは他の学生に混じって、ゆっくり登校している。

「世界って、なんか嫌いだな……」

この考えは人それぞれなので、意見は受け付けない。

「おい、山本」

横から、西村先生こと鉄人が声をかけてきたが、無視して歩き続け

――

「無視をするな」

られるはずもなく、あっさりと襟首を掴まれて、引き戻される。

「おはようございます」

「人を無視した後に、爽やかに挨拶をするな」

じゃあどうしろと？

「鉄人先生、なにか用ですか？」

それはともかく、西村先生に用を尋ねると、頭を抑えて、

「……面と向かって、鉄人と呼ぶのは、お前と坂本くらいだな。用はこれだ」

そう言って、箱から封筒を取り出し、僕の前に差し出した。

「あ、クラス編成の発表ですか」

そう言いながら受け取る。

クラスのみぼしは付いているのが、一応、封筒を破って確認する。

「うん。予想通り」

そこには、でかでかと

『Fクラス』

と書かれていた。

ちよつと事情があり、振り分け試験に出ていないため、点数がリセ
ットされ0点なのだ。

「山本」

「何ですか？」

「この結果だが、お前が振り分け試験に出ていたら、CまたはBク
ラスには入れた筈だ。……なぜ休んだ？」

そう言えば、無断欠席だったけ？

そんな事を思い出しながら、いう。

「忘れてました」

それを聞いて、呆れ顔の鉄人先生を無視して、教室へ向かう。

「Fクラスか……。楽しめるといいけど」

その咳きが聞こえたのか、近くの生徒が嫌そうな顔をして、離れて行った。

始まる前（後書き）

感想など、お待ちしています。

キャラ設定(前書き)

オリキャラがでる度に更新します

キャラ設定

やまもと そうじ
山本総司

男

17歳

家族構成

オカマ
父親と姉の3人家族

見た目

濁った感じの茶髪で、顔立ちはやや整っている。身長は175cmくらいで、身体は無駄な脂肪が付いていない。

面白そうな事には、首を突っ込んで引っ掻き回し、飽きたらそのまま放置するような、根っからの快樂主義者。
頭はいい方だが古典の成績は壊滅的。得意科目は数学で腕輪持ち

召還獣

見た目は格闘家のような姿

武器は腕に巻き付けている鎖で、基本的に振り回して戦うが、別に接近戦が弱いわけではなく、むしろかなり強い

腕輪の効果は【自爆】で400点を消費して、フィールドの召還獣すべてを一掃する。

因みに自分は生き残る。

キャラ設定（後書き）

こんな所かな

はじめましてFクラス(前書き)

それじゃ始まり始まりってか？

はじめましてFクラス

「……………ボロいな」

クラスに入る前の、いや旧校舎に入ってから感想を呟きながら、我がFクラスの前に立つ。

「おはようございます」

そう言いながら、教室に入ると、Fクラス全員の視線が突き刺さる。

その無遠慮な視線は、主に男子生徒から……………って男しくないじゃないか！

「おい、お前」

教室の前で、クラスメイトの男女率の偏りに驚いていると、教壇に仁王立ちする185cmくらいのたてがみのような髪をした男子生徒が声をかけてきた。

「おはよう。え〜と誰だっけ？」

割と有名人だった気がするが関わりがないため、あまり覚えていない。

「代表の坂本雄二だ。教室の前で立ち尽くすな、邪魔だからな。席は自由だから好きな席に座っておけ」

「はいよ〜」

適当に返しながら席、というより卓袱台（正確には座布団かな？）に適当に座る事にする。

「おはようじゃ」

「うん？」

座るとすぐに隣の席の美少女が話かけてきた。

「あ、女の子いた」

女の子はいないかと思ったがどうやら早とちりだったらしい。良かった良かった。

「わしは男じゃ！」

……………は？

「いまなんと？」

なんか男と聞こえた気が……………

「わしは男じゃと言ったのじゃ」

なん……………だ……………と！???

「そこまで驚かんでも……………。まあ、気持ちにはわからんでもないが……………

……………」

う、嘘だろ……………

「爺言葉で話しているだど!？」

「そこは驚く所ではないぞい!!!？」

うん、いいツツコミだ。

「冗談だ。僕は山本総司だ。よろしくね」

「いや、本気に見えたぞい……。気を取り直して、わしは木下秀吉じゃ。こちらこそよろしくお願いするぞい」

ニコツと笑った顔にグラツときたが、精神力で持ち直す。あ、危なかった。危うく惚れてしまう所だった。

後ろでカメラを構えているバカを無視して、秀吉(どうやら本当に男らしい)としばし、雑談をする。

始めからいい感じに話し相手が出来たし、退屈するかもしれないが、悪くない学園生活が送れそうだ。

ガラツ

『早く座れ、このウジ虫野郎』

前言撤回、退屈しない学園生活が送れそうだ(笑)

はじめましてFクラス（後書き）

雄二・秀吉登場。

次回は観察処ハカ分者登場

批評や感想、アドバイスなどよろしくお願いします。

後の祭り(前書き)

始めます

後の祭り

「ウジ虫野郎って（笑）」

坂本の台詞に笑いをこらえていると、秀吉が

「あやつらは本当に相変わらずじゃのう」

「？ 秀吉ってあいつらの知り合いか？」

秀吉の台詞を聞いて、教壇で話し合っている二人を一瞥しながら、
気になったことを訊く

「去年は同じクラスでのう。あやつらは友人じゃ。……………そこで
カメラを構えておるのも友人じゃ」

そこでカメラのシャッターをきっているバカを指す。

「さつきから無視してたが、お前はなんなんだ？」

「……………なんだかんだと言われたら「それ以上言ったらカメラ破壊
するぞ」……………冗談」

まったく、国民的キャラのボケをかますとは、予想外だったぞ。

「……………改めて、土屋康太。……………よろしくな山本」

「名乗ったっけ？」

「……………さっきの自己紹介を聞いた」

「あっそ。総司でいい。僕も康太と呼ぶから」

「……………わかった。よろしく総司」

「……………」

康太との自己紹介（？）が終わると、おそらく担任であろつ冴えない風体のおじさんが教室に入ってきた。

それで前で話し合っていた二人もそこら辺の席（？）につく。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

そう言つて名前を黒板に書こうとして止めた。どうやらチョークがなかったらしい。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

ここの設備は卓袱台と座布団と豊。……………斬新な設備だな……………。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってません』

『我慢してください』

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています』

『木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください』

『せんせー、窓が割れていて風が寒いんですけど』

『ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきます』

扱いに差があるとは聞いていたが、Fクラス《最低辺》になるとこんな感じなのか……………

「必要なものがあれば極力自分で調達してください」

「……………真面目に振り分け試験に出ていたら良かった」

今更言っても完全に後の祭りである。

後の祭り（後書き）

感想や評価などお待ちしています。

火蓋は切って落とされた(前書き)

いつの間にかユニーク1000を超えている……

やった(小さくガッツポーズ)

火蓋は切って落とされた

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

たいして興味がなかったもので、聞き流していくと自分の番になったので、立ち上がって自己紹介をする。

「山本総司だ。趣味は家事全般。嫌いな事は退屈とつくもの。一年よろしく」

そう言って、さっさと座る。

……………座る時に坂本がニヤリと笑ったのが気になった。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と読んで下さい」

さっき坂本と話していたバカ面が、なんというかバカな事を言ったのが、耳に入った。

『『『ダアアアーリイーン!!』『』『』』

どうやらこのクラスはかなりノリがいいらしい。

「失礼。忘れて下さい」

忘れるわけがない。

「とにかくよろしくお願い致します」

引きつった作り笑いを浮かべながら、吉井が席に着く。

不意にガラツと教室のドアが開き、一人の美少女が現れた。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしている所なので姫路さん
もお願いします」

先生がサラツと遅刻してきた美少女に自己紹介を促す。

「は、はい！姫路瑞希といます。よろしくお願いします……」

やはり姫路さんか、確か彼女は去年の学年次席だったはず。学力的には間違いないくAクラスに入る彼女がなぜFクラスに？

『はいつ！質問です！なんでここにいるんですか？』

ナイスだ。生徒A。しかし、いきなり失礼だろそれ。

「そ、その振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

ああ、なるほど。確か試験途中の退席や試験に欠席すると全科目0点となるんだっけ？という事は彼女は僕と同じ点数というわけだな。妙に親近感が湧く。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

僕の知り合いは簡単すぎたって言ってたぞ？

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて』

『黙れ一人っ子』

嘘つくなよ

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

流石Fクラス。バカばかりだ。

「では、一年よろしくお願いします!」

そう言っつて、姫路さんは空いてる席へ向かう。

後で話し掛けるか。そう思い唐突に襲いかかってきた睡魔によって意識を手放した。

『『『『大ありじゃあっ!』』』』

「しゅおっ!」

寝ていたら、魂の叫びに叩き起こされる。

「ひ、秀吉。一体何が……?」

比較的に冷静そうな秀吉に現在の状況を尋ねる。

『だろっ?俺だっってこの現状はおおいに不満だ。代表として問題意識を抱いている』

「なんと言っべきかのっ?」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ!改善を要求する』

「わかる範囲でいい」

『そもそもAクラスだっって同じ学費だろ?あまりにも差が大きすぎる!』

「なんとというか雄二のせいじゃ」

『そっだそっだ!』

「なるほどなんか納得した」

なにかやらかしそうな雰囲気を出してからな。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表の坂本が戦争の引き金を引いた。しばらく楽しめそう
だ。

.....敗北へのフラグに聞こえるのは僕だけなのかな？

火蓋は切って落とされた(後書き)

感想や評価、アドバイスなどよろしくお願いします！

戦力確認は大事です（前書き）

なんか昨日だけでユニーク1000を超えているんだが……

……まじっか？

戦力確認は大事です

『勝てる筈がない』

『これ以上設備を落とされるなんて……嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

Aクラスへの宣戦布告。それを聞いたFクラスのだいたいの反応である。……最後のは違うか。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

そう言うからにはなにか根拠があるのだろう。

『なにを馬鹿なことを』

そう決め付けるのは早いぞ？

『できるわけないだろ』

やってみないとわからない

『何の根拠があるんだ？』

お、普通に冷静な奴もいるな。

「根拠ならある。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

Fクラスだけ？学年最下位クラスにそんな要素あるか？

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……………！！（ブンブン）」

恥も外聞もなく覗いてたくせに、顔と手を左右に振り否定するなよ。

「土屋康太。こいつは寡黙なる性職者だ」
ムツツリーニ

ムツツリーニって、たしか男子には畏怖と畏敬を、女子に軽蔑を持つてあげられるムツツリスケベじゃなかったっけ？

『ムツツリーニだと？』『ヤツがそうだというのか！？』

『だがみる。あそこまで明らかかな覗きの証拠を隠そうとしているぞ』
『ムツツリの名に恥じない姿だ』

お前らどこに感心しているんだ？

「????？」

姫路さんは頭に多くの疑問符を浮かべているが、これは知らない方がいいだろう。

「姫路のことは説明するまでもないだろ。皆もその力はよく知っているはずだ」

元学年次席だからな、有名だろう。

「わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

『俺たちには姫路さんがいるんだ！！』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』
『ああ。彼女さえいれば何もいらぬいな』

だれだ？姫路さんにラブコールを送ってるのは？

「木下秀吉だっている」
え？秀吉って有名なの？

『おお……！』
『アイツ確か、木下優子の……』

横目で秀吉を見ると、満更でも無さそうだった。

「当然俺も全力を尽くす」

坂本が自信満々に胸をはる。

『坂本って、小学生の時は神童とか言われてなかったか？』
『じゃあ、振り分け試験の時は体調不良だったのか』
『実力はAクラスが二人もいるってことだな！』

坂本が神童って呼ばれたのは何年も前だから信用出来ないと思うがなあ。

「それに俺にこの事を言い出すきっかけになった奴もいる」

『なんだと……？』
『坂本を踏み切らせた奴だと……？』
『だれだ……？』

坂本の言葉に吉井がなんか騒ぎ出したが、な〜んか嫌な予感が……

「そいつは、『疫病神』こと、山本総司だ!！」

『『『『な、なにいいいいいいいい!!!!!!???'??'??'?』』』』

あ〜あ、言っちゃまったぜ

『疫病神が味方だと……!』

『なんて心強い……!』

『俺たちの勝ちが決まったな』

いや、そんな訳ないだろ。

ここでの『疫病神』は普通とは意味が違う。

僕を指す『疫病神』は味方また中立なら害はないが、敵に回ったらさまざまな手段を使い敵を根絶やしにするという噂が流れているんだ。

実際はそこまでひどくはない。

「坂本、勝手に戦略兵器扱いするな」

「……試験召喚戦争に参加しないのか？」

クラス中の視線を感じながら、適当に嘯く。

「まあ、この環境はあれだからね。手伝うくらいはするよ」

とりあえずの参加の意志それにクラスは一斉に盛り上がる。

『いよつしゃあああああー!!』

『勝てる勝てるぞお!!』 『俺たちの天下だ!!』

『俺のモテモテライフの始まりだあー!!』

喜ぶのは早すぎるだろ。最後のに至っては関係ないし。

僕の呆れをよそに、我がFクラスのボルテージは最大まで上がり

「それに吉井明久もいる」

シーン

ゼロに還った。

「雄二！僕の名前を挙げる必要はないよね!？」

「オチなんだろ」

『吉井って誰だ?』

『聞いたことないぞ』

さっき自己紹介してだろ？

「折角上がった土気に翳りが見えてるし、ーなんて僕を睨み付けるの!？」

こいつ割と面白いな。玩具に決定。

「知らないなら教えてやる。こいつは『観察処分者』だ」

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ?』

「ち、ちが「そうだバカの代名詞だ」肯定すりなバカ雄二!」

僕は横目で坂本が姫路に観察処分者のことを教えているのを見ながら吉井の肩に手を乗せ、

「ドンマイ、観察処分者《バカ久》」

最高の笑顔とともに毒を吐いた。

その結果、バカは教室の隅でいじけてしまった。なんでだろ?

「お主も酷いの……」

「……かわいそう」

外野が五月蠅いから無視しよう。

「とにかく、俺たちの力の証明として、Dクラスを征服する」

「へー」

「皆、この境遇は不満だろ?」

『当然だ!』

ほぼ自業自得だろ。

「ならば全員ペンを執れ!」

『おおー！！』

「俺たちに必要なものはなんだ？」

『『『Aクラスのシステムデスクだ！！』』』

Fクラス男子（隅にいるバカを除く）が拳を高く掲げた

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路さんは小さく拳を掲げた。

別に無理に合わせなくてもいいのにね。

戦力確認は大事です（後書き）

感想や評価、アドバイスなどお待ち致しています

宣戦布告と死亡フラグ（前書き）

始まります

宣戦布告と死亡フラグ

「明久、隅っこで落ち込んでないでこっちにこい」

しぶしぶといった感じに明久が戻ってくる。

「なに雄二？」

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらおう」

「今、字が違わなかったかの？」

「気のせいだ」

秀吉の台詞に坂本が断言する。気のせいか？

「……下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「それは実際の戦争だけだぞ？戦争とはいえ、ここは学校だぞ？そんな事がある訳ないだろ」

「山本の言う通りだ。騙されたと思って行ってみる」

吉井は僕と坂本の台詞を反芻しているようでしばらくブツブツ言っていたが、やがて顔を上げて聞く。

「本当「もちろんだ。俺を誰だと思っている」「……………わかった行ってくる」

坂本が力強く断言し、それを信じて吉井はDクラスへ向かった。

「坂本、お前わかって送り出したな？」

「当たり前だ」

坂本への僕の確認をすると予想通りの答えが返ってきた。

「何のことじゃ?」

秀吉が疑問に思ったのが、聞いてくる。

「ああ、明久が酷い目に遭うのがわかってて行かせたってわけだ」
「酷いのじゃ」

「ああ、さっきは援護、ありがとな山本」

「総司でいい。僕は一般論を言ったただだよ坂本」

「雄二でいい、これからもよろしくな」

「ああ、よろしく」

雄二と堅い友情の握手をする。いい友達に成れそうだ。

「最低の友情じゃの……」

「……………外道」

そんな事実はない。

雄二とDクラスにどう攻めるか議論していると

「騙されたあつ！」

命からがらといった様子で吉井が教室に転がり込んできた。

「やはりそうきたか」

流石雄二、平然と言い放った。

「大丈夫か吉井？」

「大丈夫じゃない、やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか二人とも！」

「当然だ。予想出来ないで代表が務まるか」

「二人とも少しは悪びれられろ！」

なぜ僕まで、ちょっとからかうか。

「吉井、僕はこれは予想外だったんだぞ？（もっと酷くなると思ってたからな）」

「え？そうなの？」

「ああ。吉井に（こんなに軽い）暴行するとは思わなかった」

「ごめん。山本君。さっきは怒鳴って」

「総司でいい。構わないよ吉井。お互いに誤解があったようだからな」

「明久でいいよ」

「わかった。明久だな？これからも（玩具として）よろしく」
「よろしく総司」

明久との友情が結ばれた。

「卑怯じゃ……」

「………外道」

「ナイスだ」

外野は黙れ

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが吉井に声をかける。

「あ、大丈夫。ほとんどかすり傷」

「ちっ」

吉井の台詞に思わず舌打ちがでた。

「いま舌打ちしたのは誰だ！というか雄二貴様だろ！」

「吉井、大丈夫？」

空気を読まずに島田が吉井に話し掛ける。

「あ、うん。平気だよ」「良かった。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

ヒューヒュー、明久くんモツテモテ

「だめだ！もう死にそう！」

明久が床で転げ回る。うわー、目障りだ！。

「バカはほつといて、今からミーティング行っぞ」

雄二が扉を開けて外に出たので、吉井を踏み越えて「ゲハア！？」
ついて行く。

雄二を先頭に屋上にでた僕らはDクラス戦へのミーティングをしていた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ、先に昼飯か」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいまともなもの食べよ？」

うん？明久は昼飯食わないタイプなのか？

「なら、パンでも奢ってよ」

「え？吉井君はお昼食べないひとなんですか？」

姫路さんも同じことを思ったらしい。

「いや、食べてるよ」

「……あれは食べてるとはいわん」

「どうゆうこと？」

「こいつの主食はー水と塩だから……」

「うわぁー」

流石の僕もドン引きした

「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさー！」

「水と塩と砂糖は食べるとは言いませんよ……」 「舐めるが表現として正解じゃろうな」

「……よく生きてる」

「同感だ」

「飯代まで遊びに使い込むお前が悪いな」

「自業自得かよ」

「仕送りが少ないんだよ！」

いや、おまえの自業自得だ。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「……ふーん。瑞希って優しいのね。吉井だけに作ってくるなんて」

姫路さんの台詞に面白くなさそうに言ったのは島田だ。

どうやらこの二人は明久にホの字らしい。

「あ、皆さんにも……」「俺たちも？」

「ゴチになりまゝす」

「それは楽しみじやのう」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ね」

姫路さんのお弁当が楽しみだな。

あれ？なんか明久がアホな顔してる。

「姫路さん、僕、初めて会う前から君のこと好きー」「振られたら弁当の話はなくなるな（ボソツ）」「ーにしたいと思ってました」

明久は変態だった！！

宣戦布告と死亡フラグ（後書き）

いきなりですがオリキャラを募集します。

名前

性別

ビジュアル

性格

その他

この順番で書いてください。

期限は特にありません。

オリキャラは使えそうだったら使います。

皆さん、よろしく願います。

花より団子（色気より食い気ともいう）

前回のあらすじ

吉井「僕は姫路さんのことを好きにしたいと思ってます」

「明久。本人の前でよく言えたな」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
「僕の判断力のバカーーーーーー！！！」

明久は空に叫んだが、よく見る明久。姫路さんはなんか「吉井君に求められ……はわっ（ノノノ）」

……なんか頬を赤らめているよ？それに若干取り返しがつかなそうだな。

「お前はたまに俺の想像を超えた人間になるよな」

「だって……お弁当が……」

「花より団子。色気より食い気かよ……」

こいつ本当に馬鹿だな。

「話が「明久のせいで」逸れたな。試験召喚戦争に戻ろう」

「ちよつと、総司！？なんでそこで僕の名前を出すのさ！？」「
事実だろ」

「雄二。どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏むならEクラスじゃ
し、勝負に出るならAクラスじゃろ？」

「確かにそうですね」

「当然理由はある」

明久が？飛ばしてる。もうついてこれないらしい。

「どんな理由ですか？」

「姫路さん。よく考えてみなよ」

「総司それじゃわからないぞ。まあ、Eクラスと戦わないのは簡単
だ。戦うまでも無いからな」

「えっ？でも僕らよりクラスは上だよ？」

確かに成績順にクラス分けをしているから振り分け試験の時はずえ
だっただろう。

「明久。オマエの周りにいる面子をよく見る」

明久がメンバーを見回す。

「え〜つと、美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人と常識人が
一人いるね」

「誰か美少女だと！？」

「雄二が美少女に反応するの！？」

「……………（ポツ）」

「ムツツリ二まで！？」「だ・れ・がムツツリだと？」

「総司まで！？どうしよう、突っ込み切れない！」

人をムツツリ扱いするなら、それ相応の罰を与えよう。

「落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二に総司よ」

「そ、そうだな」

「明久あとで覚えとけ」

「なんで!?!なんで総司の怒りを買ってるの!?!」

「ま、要するに。姫路と総司に問題がない以上、Eクラスには勝てる」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

明久はよくわかって無いらしい。

「明久。試召戦争は成績と戦略がものを言う。ここまではいいな?」
「うん」

「僕と姫路さんは万全な状態なら力押しでなんとかなるが、お前らは違うだろ?」

「あ、そっか。僕達は成績的に負けてるから……」

「そういうこと」

「って総司って成績いいの!?!」

なんだこいつはいきなり。

「基本的に総合は2500ちょいだな」

「Bクラス上位からAクラス下位くらいか」

まあ、そんなもんだな。

「振り分け試験受けてたら、Bクラス代表になってたかも知れない

のか……」

雄二が良かったという顔をしている。どんだけ敵にまわしたくなかったんだよ。

「それじゃ、雄二作戦の方をよろしく」

「お前は？」

「今回は補給にまわっておく。振り分け受けてないし」
「そうか」

僕はニヤツと笑う。

「このクラスは強いぜ」

「そうなの？坂本？」

「ああ、いいかお前ら。ウチのクラスはー最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない」

「退屈しなさそうだな」

「……………(グツ)」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「頑張ります」

はは。いい感じだ。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

屋上で、勝利のための作戦に耳を傾けた。

これから楽しくなりそうだ

花より団子（色気より食い気ともいう）（後書き）

まだまだオリキャラ募集中

Dクラス戦開幕（前書き）

主人公あまり出ません。

Dクラス戦開幕

前回のあらすじ

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

こんにちは。只今、化学の補給試験中の山本君です。

今はDクラス戦何だけど、僕は点数がないから参加出来ないんだ。

「次、お願いします」

三つ離れた席で姫路さんも補給試験中です。

……姫路さんの解くスピードが異常なんですが？

僕が今1枚目なのに、彼女に至っては3枚目だよ？おかしくない？

さっさと終わらして、試召戦争に参加したい！！

side 明久

「木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」
ポニーテールを揺らしながらかけて来たのは副部隊長の島田さんだ
(ちなみに部隊長は僕になっている)。島田さんに何か足りない
気がする。

何が足りないのだろうか？

「ああ、胸か」

「小指から順番にアンタの指を折るわ」

マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。

「そ、それより今の状況は!?!」

「今は……」

そう言っつて、島田さんは渡り廊下の方を見る。どうやら誤魔化せたようだ。

さてと今の状況は……？

『さあ来い！負け犬が！』

『鉄人！？補習室は嫌なんだ！』

『黙れ！捕虜は全員この試召戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！』

『見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない』

『拷問？これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎という理想的な生徒になるだろ』

『鬼だ！誰かたーイヤアアアア（ボタン、ガチャ）』

なるほどよくわかった。

「島田さん、中堅部隊に通達」

「作戦？なんて伝えるの？」

「総員退^{ケサツ}」

チヨキで殴られた。

「目があつー！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その台詞はグーかパーで殴った後に言っつて欲しかった。

「吉井、ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツら

が消費した点数を補給する間はウチらが前線を「島田、吉井前線部隊が撤退を開始したぞ！」——総員退避よ」

途中で言ってる事が変わってる。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「うん。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

Fクラスに方向転換。

するとそこには本陣に配属された横田君がいた。

「？横田じゃない。どうしたの？」

「代表と山本殿より伝令があります」

どうでもいいけど山本殿なんだ。

「まずは代表から『逃げたらクロス』」

ア、アハハハ。クロスって、そんなわけ……。

「山本殿からは『逃げてもいいよ』」

総司君はなんて優しいんだ！

「まだ続きます『メイド服かナース服のどちらかのコスプレかを選ぶ権利はあるから』」

「全員突撃しろっ！」

気がついたら戦場に向かってダッシュしていた。

これはFクラスの勝利のためだ！

「お？」

今微かに明久の叫びが聞こえた。

どうやら横田君からのメッセージを受けたみたいだ。

「さっさと終わらせますか」

そう呟きながら、問題を解いて行く。

一時間くらいで合流できるかな？

Dクラス戦開幕（後書き）

まだまだオリキャラ募集中。

喰らえ、ライダーパンチ！！（前書き）

タイトルがあれだね……

喰らえ、ライダーパンチ！！

前回のあらすじ

島田「目を覚まさない、この馬鹿！」

どうも、やっと補給試験が終わって、戦場に出てこれた山本君だよ？

いやー、意外と補給に時間がかかって、困ったことに、もうすぐ放課後なんだよなー。

まだ一回も戦ってないから、早く戦いたいなー。

そんな事を考えながら、教室に戻ると、

「やれる、僕なら殺れる」

「殺るなっの」

.....。

「え〜っと、どんな状況？」

なにがなんだかわからない。

なぜか明久が包丁と靴下（砂が入ってるぽい）を持ってハアハア言ってる。

「雄二何があった」

「ん？総司か。いや明久が放送を頼んださいに俺が明久が船越先生にラブコールを送ったことしただけだ」

ああ、なるほど。船越先生（婚期逃した独身女性）に明久が告白したことになっているのか。

「シャアアアアツ！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに雄二の肝臓へ包丁を突き出し、同時にブラックジャックもどきを雄二の頭へとー

「あ、船越先生」

その前に明久が掃除用具入れに飛び込んだ。

「馬鹿は放っておいて、決着つけるか」

「はいよー」

「……………（コクコク）」

「そうじゃな。下校しておる生徒も見え始めたし、頃合じゃろう」

「Dクラス代表の首を刈りに行くぞ！」

『おっっ！』

楽しい狩りの始まりだ。

「あー、明久。船越先生が来たってというのは嘘だ」

「いや、そもそも来たなんて一言も言ってないし」

明久にそう言って、教室を出る。

すぐに渡り廊下で交戦に入ったので、すぐに戦うことになった。

適当な生徒に決闘けんかを売る。

「Fクラス山本総司が日本史で勝負を挑む。試獣召喚サモン」

「馬鹿が調子に乗るな。試獣召喚サモン」

お互いに召喚獣が出て来る。

相手の召喚獣は軍服にサーベルという格好。

対する僕の召喚獣は流れ者の格闘家のような姿だった。

「馬鹿が勝てると思うなよ！」

そう叫びながら突っ込んで来たので、右に避けて拳を叩き込ませた。
が、倒せなかったようだ。

「なにいつ！」

「こんなもんか」

『Dクラス 齋藤雅人 VS Fクラス 山本総司
日本史 46点 VS 221点』

思ったより今回は取れたんだよね。

「嘘だろ！？Fクラスかお前は！？」

「Fクラスだよ。不本意にもね」

そう言つて、召喚獣の腕に巻き付いていた鎖を振り回し、戦死させる。

「よわっ」

この結果から、驚異だと思つたのか相手の本陣の3人が一気に遅い掛かってきた。

「えいつ！（ヒョイ）」

「この！（スカ）」

「おら！（ヒョイ）」

三方向からの攻撃をメタル ライムのごとく避け続ける。

『Fクラスの姫路瑞希です』

『えっ？』

向こうで終わりのフラグがたったみたいだ。

すぐにDクラスの代表が討たれて、試召戦争は幕を閉じた。

あー、なんだか暴れ足りない。
合計で10人を戦死させた人

喰らえ、ライダーパンチ！！（後書き）

オリキャラはまだまだ募集中です！

Dクラスとの戦後対談 (前書き)

オリキャラ案がかなりバランスブレイクなんだが……

設定を弄って使うか。

それではどうぞ

Dクラスとの戦後対談

前回のあらすじ

姫路「Fクラスの姫路瑞希です。試獣召喚^{サモーン}」

Dクラス代表 平賀源二 討死

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、うざったい大音響が校舎を駆け巡った。

「本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳と卓袱台ともおさらばだな」

「あれはDクラスの物になるからな」

「坂本サマサマだな!」「坂本万歳!」
「姫路さん愛してます!」

至る所から雄二を褒め称える声が聞こえる。

毎回思うが姫路さんにラブコール送っているの誰だ?

向こうで明久が雄二に包丁を突き出したが、あっさり手首を捻り上げられたようだ。

何やってんだよアイツら……。

あれは放っておいて、Dクラス代表の平賀源二の所へ行く。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」
「振り分け試験中に高熱を出したんだってよ」

ブツブツ言っていた平賀に話かける。

「そうだったのか……。……君は?」
「僕はFクラスの山本総司だ。よろしく」
「山本君だね。なんの用だい?」
「あれも終わったから戦後対談するよ、って」
そう言っつて雄二の方を指す。

「ああ、わかった」

平賀君が雄二のもとへ向かう後について行く。

「平賀、きたか」

「ああ、ルールに乗っ取ってクラスを明け渡そう。ただ「その必要はない」「ーどついうことだい？」

「雄二なんで？」

「Dクラスを奪うつもりはないからだ」

「なんで？せつかくの普通の設備を手に入れることができたのに」

「明久、目標を忘れたのか？まあ、気持ちはわからんでもないが。まあ、雄二の次への布石だろ？」

ニヤツと笑いながら、話に混ざる。

「総司。よくわかったな？」

「明久じゃあるまいし「ちよつとどついうことだよ！」ー明久黙れ。Bクラス戦の為だろ？」

「Bクラス……。ああ、Bクラスの室外機かな？」

平賀はそこそこ頭がまわるみたいだ。

「ああ、こちらの指示でアレを動かなくしてもらいたい」

「それだけかい？」

「ああ」

「……そうか。ではありがたくその提案を飲ませて貰う」

取引成立。チヨロいね。

「もし、破った場合『疫病神』が敵にまわるから気をつけるよ」

「待てゴラツ。勝手に僕を使うな！」

なぜかその言葉に明らかに平賀が引く。

「……す、すまない。君を敵にまわすつもりはなかったんだよ!」
「……平賀。こっちが仕掛けたんだから、謝らんでも」

明らかに腰が引けてる。

「あー、約束は守ってね?」

「は、はい!」

そう言っつて、平賀君は去って行つた。

帰り道。僕と秀吉は方向が同じなので、一緒に帰る事になっている。
「それにしてもお主は凄かったのう」
「どこが?」

秀吉の凄かったの意味が分からず首をひねる。

「あの召喚獣の戦いじゃ」

「ああ、あれ」

秀吉が呆れたように言っつて、ようやく意味がわかる。

「なんで三方向から攻撃されて、ほぼ無傷だったのじゃ？しかも関係無い戦いの敵を倒せるのじゃ？」

「いや、あれの前にある程度、召喚獣の操作を把握したから、出来たんだよ。あと、最初のうちは、よけながら適当に鎖飛ばしたら敵当たったんだ」

「つまり途中から狙ってやったのじゃな……」

秀吉は敵でなくて良かったぞいと言って、安堵の息をはく。

ここで秀吉に前から気になっていた事を訊く。

「なあ、秀吉」

「なんじゃ？」

「なんでお前らは僕が『疫病神』だって知っても変わらずに接する事ができるんだ？」

僕は疫病神という渾名のせいで、まともな友人ができたことがない。

だからこそ、秀吉や雄二、明久、康太が変わらずに接することができるのかわからない。

「？そんな事決まっておるじゃろ」

「？」

「友達だからじゃ」

わしはこっちじゃからと言って、秀吉と別れた。

「友達か……」

秀吉が当たり前のように告げた言葉が、自然と口から漏れた。

「いつもありがとうございます」

この日、僕は初めて嬉しさから泣いた。

Dクラスとの戦後対談 (後書き)

主人公…………… (ー；)

オリキャラはまだまだ募集中です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1263y/>

バカとテストと疫病神

2011年11月10日08時15分発行